



国際化のために

岩手県一戸町教育委員会外国語指導助手
Claire Dawn-Marie Gittens
クレア・ドンマリー・ギテンス

このJETというプログラムには素晴らしい人々がいます。インドやタイ、ネパール、日本で行われる慈善活動のために、数億円のお金を準備する人がいます。養護施設で2カ国語の芝居をする人もいます。アイルランドの踊りやギターの弾き方を教える人もいます。日本の人たちはその人々からいろいろなことを教えられます。本当にこのJETプログラムには、とても素敵な参加者がたくさんいます。

でも、私は素敵ではありません。

教えられるのは外国語だけです。私は4カ国語を話すことができます。英語、それからフランス語とスペイン語とイタリア語です。私のいる町では、皆さんは英語だけを習いたいと思います。岩手県は本州で一番大きな県ですが、JET参加者は25人だけです。25人では大きなイベントができません。去年、町の4人のALTで、4つの中学校で簡単なクリスマスの芝居をしました。でも、これだけでは足りないのです。

日本は私に多くのことを与えてくれます。私は日本語を5つ目の言語としてを勉強しています。素敵な日本人と、いろいろな国からの人々との出会いがあります。自分の力では見えなかったことが、今は見えます。私は今、1967年にスコットランドの歌手のルルが歌った「いつも心に太陽を」という歌詞と同じ気持ちです。What can I give you in return? 私は十分与えていますか？

私は何も持っていません。私が持っているのは私という人間だけです。

私は日本にいる外国人です。カリブ海のバルバ

ドスという島から来た黒人の女です。日本に住んでいる2年間で、JETプログラム以外で会った日本人の中で、私の島を知っている人は1人しかいませんでした。

JETプログラムには大きく2つの仕事があります。ひとつは、外国語を教えたり、国際関係に携わったり、スポーツトレーニングをするといった、皆さんがよく目にする仕事です。そして、もうひとつは、国際化を図ることです。

私は最初から車は欲しくありませんでした。いろいろな理由がありますが、一番の理由は、国際化が図れないからです。

外国人はいつも見つめられます。町に初めて来た週、朝7時頃ランニングをしていたら、高校生たちが同じ道を歩いていました。その1人が私を見ながら側溝に嵌まりました。それを見た彼女の友だちが彼女を笑っていました。あの時から、私は時々あの子について考えています。なぜあの子は側溝



インド旅行のことを教える

は嵌まったのでしょうか？ 皆さんはいつも大きな問題について考えていますが、あの子に必要なのは、盛岡で開催するような大きなイベントではありません。あの子は外国人を見ることが必要です。テレビ以外で、町にいる外国人を。岩手県に住む唯一の黒人JET参加者として、私の特務を思い知らされました。

そして、私は国際化のために日本語をよく勉強します。日本に来た時、日本語が話せない外国人にたくさん会いました。1、2年、日本に住んでいて、まだ日本語を話せませんか？ その人たちは努力をしていません。驚きました！ 来日して2年間で日本語が難しいのがよくわかりましたが、今、私は頑張っています。もしこの機会を利用しなければ、私の中の言語学者が許しません。

私の出身は大西洋の方でも、人々には良く知られていない国です。日本人はいつも「どこの国から来ましたか？」と聞きます。だから説明が必要です。「カリブ海のパルバドスという島から来ました。カリブ海は、アメリカと南アメリカの間です。ジャマイカの近くですけど、ジャマイカより南アメリカの方に近いです」。こうした言い方はとても大切です。私はアメリカ人ではありません。そして、大西洋には他の国がもっとあります！

国際化のために、私は日本を旅行しています。東北や北海道に住んでいる友だちの家に泊まります。宮城県の南へ、電車で5時間かけて旅行しました。また、北海道の南富良野には11時間かけて旅行しました。友だちの町に着いたら、町のあちこちを見て歩きます。そして、祭りを探すことも好きです。札幌の大通り公園で、あるおばあさんが「一緒にやりませんか？」と言ってくれたので、初めて見る踊りでしたが参加することにしました。最初はとっても下手でしたが、だんだん踊れるようになりました。観客からは「上手だね」というささやき声が聞こえました。

日本の文化を経験することも仕事の一部です。日本を後にしても、いつまでも日本のことをおぼえていられるように、学校と町のイベントによく携わります。そして友だちをつくります。

私は3つの学校で教えています。2つは大きい



みそづくり



祭り

学校ですから、いつも忙しいです。もうひとつは30人の小学校です。この学校ではみんな家族のようです。学校のイベントでは先生方がいつも忙しいので、私は手伝っています。水泳大会ではカメラマンとして、運動会ではゴールテープを持つ人として、手伝っています。そして、生徒たちと昼ごはんを食べます。ある1人の生徒は、いつもNARUTOのアニメについて話しています。

私は日本での生活で、いつもいろいろなことに関わります。スポーツ大会をよく見ます。3つの学校と幼稚園の文化祭や運動会、卒業式、入学式を見に出かけます。夏祭りでは町の踊りを踊ります。山車も引っ張ります。来年は横笛の吹き方を習うかも知れませんが（太鼓を習いたいと思っていましたが、太鼓の先生に「パワーがない」と言われました）。

このJETプログラムは単なる仕事ではありません。JETという言葉はJapan Exchange and Teaching.、そのExchangeという言葉には「交換する」という意味があります。日本はあらゆるものを私に与えてくれます。私は十分に与えているでしょうか？



クレア・ドンマリー・ギテンズです。カリブ海のパルバドスから来ました。28歳です。来日する前はフランス語とスペイン語を教えていました。その前は、観光の潜水艦にガイドとして働いていました。趣味は

旅行する、音楽を聞く、本を読む。2008年の8月から日本に住んでいます。よろしくお願ひします。

Claire Dawn-Marie Gittens



ガチャピンの 秘密の正体

神奈川県立座間総合高等学校外国語指導助手
Joshua Teperman
ジョシュア・テパーマン

授業が始まる前に、教室の外でうろうろしている生徒たちの中を通ろうとすると、私は胸元までぎりぎり身長がある少女に止められます。彼女は首を伸ばし、オシャレな前髪を透かして私を見上げます。彼女に握手のやり方を年始に教えたのに、彼女は私の体のどの辺をつかめばいいか迷っていて、手を突き出して私の前腕をつかみます。私もどうすればいいか迷ってしまって、彼女を見下ろしたままです。間もなく彼女は顔を少ししかめて、思い切ってきれいな発音をしようと「Joshhh」と言い、「sh」を強調します。待ってみても続きがなかなか出そうにないので、私は真似をして答えます。「Joshhh」。彼女はこれに満足そうな顔をしてくれず、私の前腕を離します。ついに彼女との儀式が終わって、私は授業へ向かいます。

しかし、教室まで着くのはまだまだ楽勝ではありません。数メートルにつき、元気な生徒とハイタッチなどの挨拶をするために足を止めないといけません。なぜか男のほうから愛を告白されます。

やっと教室に辿り着き、廊下で待っているJTEのジミーに会います。ジミーはかっこよくて私のお気に入りの先生の一人です。皮ジャケットをよく着るし、ポニーテールをしているし、ギターを弾くし、バイクも持っているし、生徒ととても良い距離を持っている先生です。今日ジミーは私が先に教室に入るように促すので、私は足を踏み入れます。すると、机で座っている生徒たちから喜びいっぱいの拍手で迎えてもらいます。「サンク・ユー！ 久々だね！」と私も調子に乗って元気よく答えます。ジ

ミーはまだ外で待っているの、彼の入室をアナウンスしようと思います。「それでは皆様、ただ今から、ご期待してきたスーパースターの登場になりますので、暖かい拍手で彼をお迎えください。イツ・ジミー！」と私の大きい声を背に、ジミーは手を振りながら教室に入ります。これを見た生徒たちは拍手と歓声で先生を迎え入れます。

ALTというのはロール・プレーが多い仕事です。私は教室の内側に足を踏み入れるたび、「ALTの帽子」を被ってしまいます。この「帽子」を被ると、人前に入る時の緊張感が払拭され、普段恥ずかしく思うことが気軽にできるようになります。これは私がJETプログラム希望者に薦めたい、教える際のこつです。我々は学校のセレブだからその役を大げさに見せて、自分の新たな個性「ペルソナ」にしてしまうほうがいいのです。恥じらいを持たず、進んでばかなことをするような明るい性格になることも薦めます。まず先生が楽しめるからこそ、生徒も楽しく学ぶことができるからです。

我々ALTの目標を考えると、英語の教育を進めることのみならず、生徒の英会話に対する不安を解消させ、楽しく習える環境を育てることも重視しなければならぬと思います。どうせALTの職務は英語を教えることだけだ



オーレ!



ガチャピンの秘密の正体

といったら、JTE 1人でもできるでしょう。だからJETプログラムのALTは、普通の英語の先生より多く目指すことが当然です。

ALTとして、生徒の興味を引く私の最大武器がユーモアです。自作の親

父ギャグを生徒に試したり、黒板に変な絵を描いて生徒を迎えたり、いろいろ工夫をしています。昨年のハロウィーンに、ガチャピンの着ぐるみを着て、丸一日、授業をそのまま行ったこともあります。でもやはり、そのコスチュームが子供用だったから、私の195cmもある体にはピチピチで、短すぎるものでした。そのため、つまずきを問題ともせず、黄色いロング・ソックスと緑色のマニキュアで補って、今振り返るとオーストラリア人なりの自慢のガチャピンでした。一日中、私の授業で寝ている生徒が一人もいませんでした。

生徒の注目を引きつける方法はもう一つあります。それは歌うことです。普段知らない人の前だと恥ずかしいことだけれど、「ALTペルソナ」のおかげで授業の中でマイケル・ジャクソンの「We Are the World」のソロができました。その翌日、廊下でそのクラスの生徒に追い詰められ、当日欠席だった彼女の友だちのためにまた歌うようにせがまれてしまいました。

JETプログラムが英語の教育より広い意味を持つてるということは明らかです。私は生徒との関係が、先生と友だちとの半ばで、あいまいな位置にあるとわかった結果、生徒と平等な立場に立って深く交流できている長所があると思います。私は授業以外にもよく生徒と遊んだりしていて、日本語で話すことも多いです。サッカー一部の訓練に参加したこともあり、またこの間文化祭に出で、フラメンコを生徒と一緒に踊り



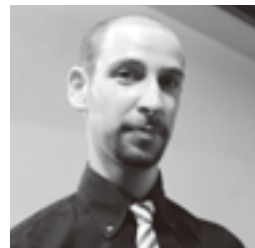
スカイダイビングの後

ました。スカイ・ダイビングに行った時でも、日本人の先生を何人が引っ張って行って（1人だけ英語科）、そこで撮った動画を授業で流しました。

おかしなことに、一番生徒に印象を残せたのは、英語に一切関係ない活動だったと思います。私は大学で美術専攻だったので、日本に来てからずっと絵を描く機会を待っていました。今でもしばしばアパートの中で美術をやっていて、たまに作品を授業の前に生徒に見せることにしています。そのきっかけで美術の先生と仲良しになりました。彼は美術部の生徒のためデッサンのゼミを行うように招待してくれました。喜んで私は了解し、学校の休みにデッサンの静物ワークショップをさせてもらいました。私の作品をスライド・ショーで見せたり、オーストラリアにおける美術大学の生活について語ったりしました。そのワークショップのおかげで、生徒が興味を持っていることを通して交流ができ、私の違う面を見せるとても良いチャンスも得ました。

あの日の午後、私たちはJETプログラムの「E」が表している「Exchange」のほうに重点を置いて、生徒と先生の上下関係に気をつかわずに、対等の立場から話し合いました。

JETのALTは英語の先生だといわれるけれど、それよりずっと良い役割を目指すことができると思います。このプログラムを充実したものにしたら、生徒と先生という固定概念のワナをさけて、心を通わせようとしたほうがいいです。英語に興味がある生徒はもとより、あまりできない子とでも温かい関係を作ろうとすれば、あなたの日本での経験はそのぶん価値のあるものになるでしょう。



オーストラリアのメルボルン出身。日本に来るつもりはなかったけれど、たまたま大学で選択授業として日本語をとってからのというもの、日本へ向かう気持ちは強まる一方へ。2008年に3カ月間、福岡市で語学学校に通いながらホームステイをした。その直後に座間市でJETプログラムの

ALTとして働き始め、今は最終の3年目を迎えてしまった。2011年にオーストラリアに帰らざるを得ないけれど、将来、母国と日本どちらでもキャリアを積んでいきたいと思っている。

Joshua Teperman

International Me

There are some amazing people on JET. Every year, JETs raise millions for charities in Japan and around the world. They organise orphanage visits or drama productions; teach Irish dance or give guitar lessons. Japan gains so much from them being here. Yes, there are hundreds of amazing young adults on this program called JET.

I am not one of them.

Iwate, the second largest prefecture in Japan, has a JET population of only 25. I just don't have the manpower to pull off major events. Last year, I started the four Western foreigners of my town doing an English play for the junior high schools. But it hardly seems like enough to give back.

Japan has given me this life: an opportunity to learn my 5th language, meet amazing people and see things I never would have been able to see on my own. To quote To Sir With Love, "What can I give you in return?"

I have nothing. Except the one thing that no one else in the world has. Me.

I am a foreigner in Japan.

A Black female foreigner from Barbados.

When they recruit for the JET Programme, they advertise two jobs. Firstly, the job that goes on your VISA. Most of us are teachers of English or another foreign language, a few of us are Coordinators of International Relations, and just a

handful come to work with Sports programmes. The other job? Internationalisation.

I don't have a car. Frankly, I'm a little scared of having to deal with anything going wrong. And that's the reason I give people. What I don't tell them is this: If I don't drive I'm more visible. And that's internationalisation.

My first week in my town, I went for a morning run. I passed a group of high schoolers. Their eyes lingered longer than was comfortable. One girl was staring so hard at me that she fell into a ditch.

I still think about her.

People tend to get all caught up in the big things. But a massive event in Morioka (the Iwate capital) was not what that girl needed. She needed to see more foreigners, in real life, right here on the streets of her town. And I thought- still think, in fact- that, as the only black JET in my prefecture, it's my duty for her to see me.

Internationalisation is also a big part of the reason I study Japanese. I've been here for two years now. My Japanese is decent, although not good enough. I'm a bit of a language-aholic. My degree is in French and Spanish. And, while I was applying to the JET Programme, I did a year of Italian for fun. The linguist in me would kick itself for not taking advantage of this amazing immersion opportunity. But I also make an effort

Gachapin's Secret Identity

Making my way through the crowd of first year students loitering outside the classrooms in the break between classes, I am stopped by a girl that barely comes up to my chest. She cranes her neck to look up at me through her fashionable fringe, and her hand shoots out and grips my forearm as though unsure which part of me to grab, even though I taught her about handshakes at the beginning of the year. I look down at her, wondering how to respond. She frowns slightly, as though focusing on the formation of the sounds, and utters a single word, "Joshhh", accentuating the 'sh'. I wait for her to say more but she doesn't, so I reply, "Joshhh". She appears satisfied with this and nods slightly, as though I had confirmed her suspicions. The ritual over, she releases my arm, letting me continue down the corridor.

Reaching my classroom is no simple task however, as I must pause every few metres for the obligatory high fives, fist pumps and other greetings that the more genki students throw at me. For some reason I seem to get more protestations of love from the boys than from the girls, who smile shyly instead.

Finally I reach the classroom and greet Jimmy, the JTE who's waiting for me outside. He's one of my favourite and most groovy teaching partners. He wears leather jackets, has a ponytail, plays guitar, rides a motorcycle, and has a really fun way with the students. He urges me to enter the classroom first,

so I step inside. By now all the students are sitting at their desks. As soon as I set foot inside the door, I am greeted by a cheer of excited applause. "Thank you! Thank you!" I cry, "Long time no see!" I decide to play along and commentate Jimmy's entry into the classroom. "And now, in the left corner, weighing in at 300 pounds, it's Jimmyyyyy!" I announce, as my teaching partner swaggers into the room, waving his hands to the cheers of the class.

A lot of being an ALT is role-playing. I put on my 'ALT hat' when I step inside the classroom, which allows me to do things I might feel embarrassed to do in the real world. I feel that our job is as much about making English enjoyable and comfortable for the students as it is about actually teaching English. After all, if we were here just to teach English, then the JTEs would be able to do the work by themselves. A JET ALT needs to be more than just an ordinary teacher. I would urge prospective ALTs to develop a persona where you have no inhibitions and aren't afraid to make a fool of yourself. Play up your celebrity status and have fun. As an ALT, my biggest weapon to connect with students is humour. I like to practice my *oyaji gyagu*, or 'old man jokes' on my students, or draw funny pictures on the blackboard to greet them when they come into class. Last Halloween I spent a day teaching classes wearing a 'Gachapin' (a children's cartoon

Claire Dawn-Marie Gittens

with it so that I can meet Japanese people halfway.

I come from a tiny island. Even in the West, people don't know where it is. I often find myself explaining where my country is. One of the first things I taught myself after arriving in Japan was how to introduce my country. I'm from Barbados. It's in the Caribbean. That's the sea between North America and South America. It's close to Jamaica, but it's closer to South America. I learned how to say this well before I could say my age properly. It was so much more important. Japan needed to know that there is a West which is not America. They still do.

That's also why I travel Japan. It's true that I love travelling, and I'll take any excuse to hop on a train, bus, boat or plane, but I realise that foreigners are scarce in Japan, and the scarcest subset is Black females.

Wherever I go, I like to walk around, be seen and get involved. When I was in Odori Park in Sapporo and a little old Japanese lady asked me to join in a dance I'd never seen before, I jumped right in. I made a royal mess of it on the first go around. But by the third time, there were mutters of "jouzu desu" in the crowd.

That's internationalisation too. Not just to shell out doses of my culture wherever I can. But to be a sponge for Japanese culture, so that when I move on, I take Japan with me. I make every effort to be seen more by getting involved everywhere I

can.

At my small elementary school, there are 30 kids in six grades. I love sitting around the staff room making small talks with the school nurse and the caretaker. Before I could speak Japanese, they'd talk to me all day anyhow. Conversations were hilarious combinations of drawings and sign language. I've been here a little over two years, and I'm finally starting to become less of "the foreigner" and more "Claire." One of my kids at that school has a NARUTO pencil case. One day I asked him if he'd seen the new movie, and he said not yet. I told him I'd seen it when I was in Tokyo. Now every time he sees me we talk about NARUTO tidbits.

And it's the same way at schools and in my community. I talk to everyone I can. I try hard to be at all the public events. I go to the kids' Sports tournaments. I dance in the town festival. I pull my neighbourhood's float. Maybe next year, I'll even learn to play the flute. (I thought about learning taiko, but the taiko guy laughed and said I have "no power!")

This program, to me, is not just a job. It's the Japan Exchange and Teaching Programme. Exchange. Japan gives me its everything. I only hope I give enough in return.

英語

Joshua Teperman

character) costume, a garish bright green dinosaur outfit with fluffy baubles and a tail. The child-sized costume was much too short for my 195cm frame, so I supplemented it with long, bright yellow socks and green nail polish. I didn't have any sleeping students in my classes that day!

Another way to capture students' attention is by singing. Though I wouldn't be comfortable in public, my ALT persona allowed me to stand up the front of the class and sing a solo of "We Are the World" by Michael Jackson which the students were practicing for a festival. The next day one of the students from that class cornered me in the hallway and tried to get me to sing again for her friend who had missed the performance because she was absent the day before.

It didn't take me long to realise that the JET Programme is about much more than teaching English. I have come to see myself as somewhere between teacher and friend to the students, and I feel that gives me a unique opportunity to connect with students on their level. That means speaking to them outside of the classroom, and often in Japanese. I have joined in soccer practice, and recently I took part in a flamenco performance for the school's annual Culture Festival. I even convinced a couple of my teachers (only one of them an English teacher) to come skydiving with me, and then showed the video in my classes.

Funnily enough, I think one of the most lasting impressions I have made on my students has been through an activity that included almost no English at all. As a Fine Art major at university, I was itching for an opportunity to draw again now that I was in Japan. I still draw a little bit in my apartment, and from time to time I bring artworks in to class to show my students. I befriended the art teacher at one of my schools, and he invited me to put on a drawing seminar for his art club students. I happily accepted, and during the school holidays I conducted a still life drawing workshop. I made a slideshow of my work, and talked about life in an Australian art school. It was a great opportunity to show students a different side of myself, and to connect with them on something that they were genuinely interested in. For one afternoon, we focused on the 'E' part of the JET Programme, exchanging ideas as equals, the roles of teacher and student forgotten.

JET ALTs are English teachers, but I believe we can be so much more than that. If you want to make the most of your time on this program, find a way to connect with your students that avoids the pitfalls of teacher-student hierarchy. If you can reach your students, and not just the ones who like English, then your time in Japan will be that much more rewarding.

英語